

有機農業の町

綾町

を訪ねて



まほろば本店店長
大橋 和則



綾との出会い

今から 24 年前、社長の宮下が宮崎県綾町を訪れ『心の町・綾町』の小雑誌を発行。一読し、何時かは訪れてみたいと思い描いていました。(店頭に小冊子ございます)

当時、送料の関係と有機野菜の普及の為に、札幌市場の仲買 米内青果さんに依頼し綾町の野菜を仕入れていましたが、いつの間にか先細りになり、仕入れが途絶えていました。米内青果さんの社長さんが他界され、有機の扱いを止められたのを境に、直接綾町さんとの野菜の取引を再開。当時農協職員で担当だった郡文則^{こおり}さんが実家の農業を継がれた事もあり、人参、大根、里芋、ごぼう、長ネギ、春菊、さつま芋、レタス類などを仕入れ、今年はまほろばの依頼に合



わせて作付けして頂いています。その他は綾町農業支援センターから送って頂いていますが、自然生態系農産物としての実績は他の追随を許さず、さすが「綾」と言いたくなります。

今年の 6 月、郡さんが「自分の野菜がどの様に届きどの様に販売されているかを見て、お客様の声を直接聞きたい」と 3 泊 4 日で来店。実際に店舗に立たれ販売して頂きました。実直な人柄



綾町の有機農家、郡文則さん

で、直ぐに従業員とも打ち解け、お客様とも会話が弾んでいました。今まで数多くの生産者と取引してきましたが、郡さんほど荷物の状態や味、お客様の評判など気にされ連絡して頂く生産者はいませんでした。最後まで生産者としての責任と自覚を持ち、真摯に対応して頂いています。



いざ、綾町へ

その郡さんから 11 月には第 29 回の有機農業まつりがあり、綾町有機農業実践振興会の会長をしているので、社長と二人で是非出席して欲しいと依頼を受けていました。しかし今回、社長が農作業で忙しく出席出来ないため、私一人でお伺いさせて頂きました。

ちょうど一昨年の 2 月に、ある有機認証団体から生産者交流会の中での講演依頼があり、「今後の有機農業の未来」と題して、元農業者の立場と販売者の経験から、世界の有機市場と日本の現

状を報告する中で、綾町も題材として調べていました。

有機食品の年間出費額で比較すると、日本はアメリカの 1/8、EU の 1/4 と少なく、東京オリンピックに向けて政策主導で伸ばそうとしています。EU のオーガニック産業は「政策主導型」ではあります。自然環境の保全や理念に共鳴という「利他的動機」が有機食品の購入動機の高い割合を占めているのに対し、アメリカは「市場主導型」が先行し、市場の発展を受けて有機認証や関連制度が整備されました。銃社会を象徴するように「利己的要素」で伸びてきたと考えられます。

日本の市場はどちらかと言えばアメリカ型で、「健康」「美味しい」「安全」等の利己的要素での広がり、今後の国内での方向性を考えた場合に、食と自然環境、循環型農業など利他的要因を深め、地域の活性化を図って行くべき答えが、綾町の今迄の取り組みの中に有るのではないかと報告させて頂きました。

日本の人口が 0.8% ずつ減少していく中、綾町は農村地帯にも拘らず 30 年前とほぼ同じで、世帯数が逆に増えている魅力は何処にあり、半世紀前から始まったこの動きが今も継続し、更に深み

自然生態系農業への取り組みの背景

1988年に「自然生態系農業の推進に関する条例」を制定した綾町は、本格的な有機農業による町づくりに取り組むことになりました。このきっかけとなったのは 1967年(S.42)の「一坪菜園運動」の始まりです。「健康で住みよいまちづくり」をスローガンに町民の健康の維持・食生活の改善の一環としての家庭菜園による野菜づくりが提唱されました。

有機物を投入した土づくり、野菜の種子を無料配布、家庭菜園コンクールなど、町民の自給運動は広がりを見せました。

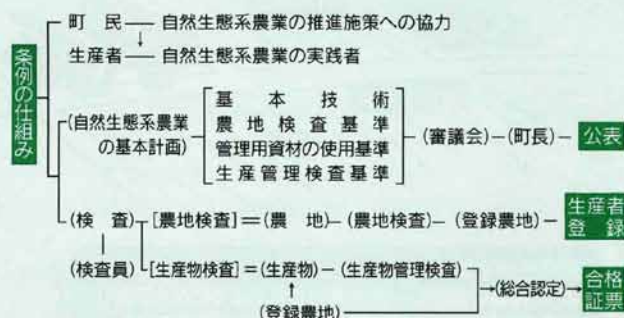
一坪菜園の普及に伴い、「青空市場」を開設(1976年(S.51))すると消費者の好評を得て、今日の「綾手づくりほんものセンター」(1989年(H.元))での販売へと発展し、当初の予想を超え町外へと広がり様々な活動へとつながっていきました。

自然生態系農業の推進に関する条例の仕組み

綾町憲章

「自然生態系を生かし、育てる町にしよう」

- 綾町農業の安定的かつ長期的な振興
(土づくり、安全な農産物の生産、健康、住みよい環境の保持等)
- 消費者の健康と文化的生活の確保
(安全な食品、健康、住みよい環境の保持等)



綾町視察の旅



を増し世の中に有機農業の町「綾」の名を馳せる事が出来ているのは何故かとの疑問を、実際に見聞したいと思っていました。

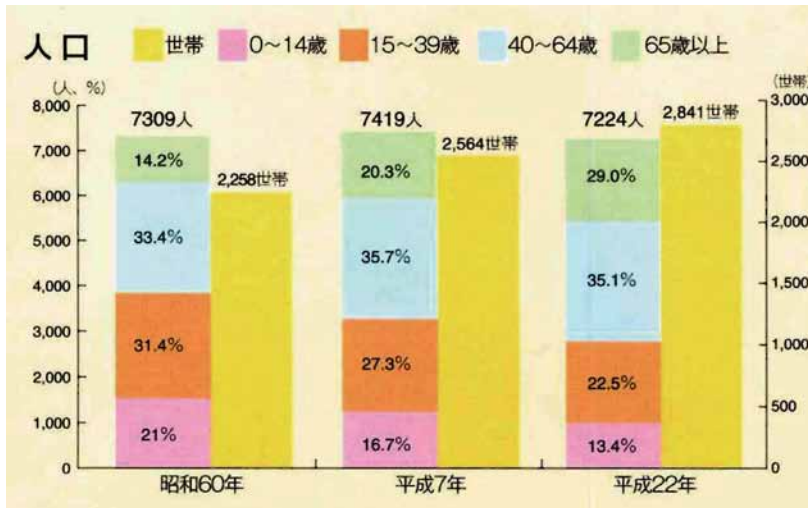
まずは郡農園圃場見学

綾町市内から西に車で10分程、途中細い山道を通り小さな集落へ、昔は1時間位掛け

て学校に通っていたが子供の通学を考え現在の自宅は町の方に移転しているとの事。畑は4h、内1haは新規就農者に現在貸しています。

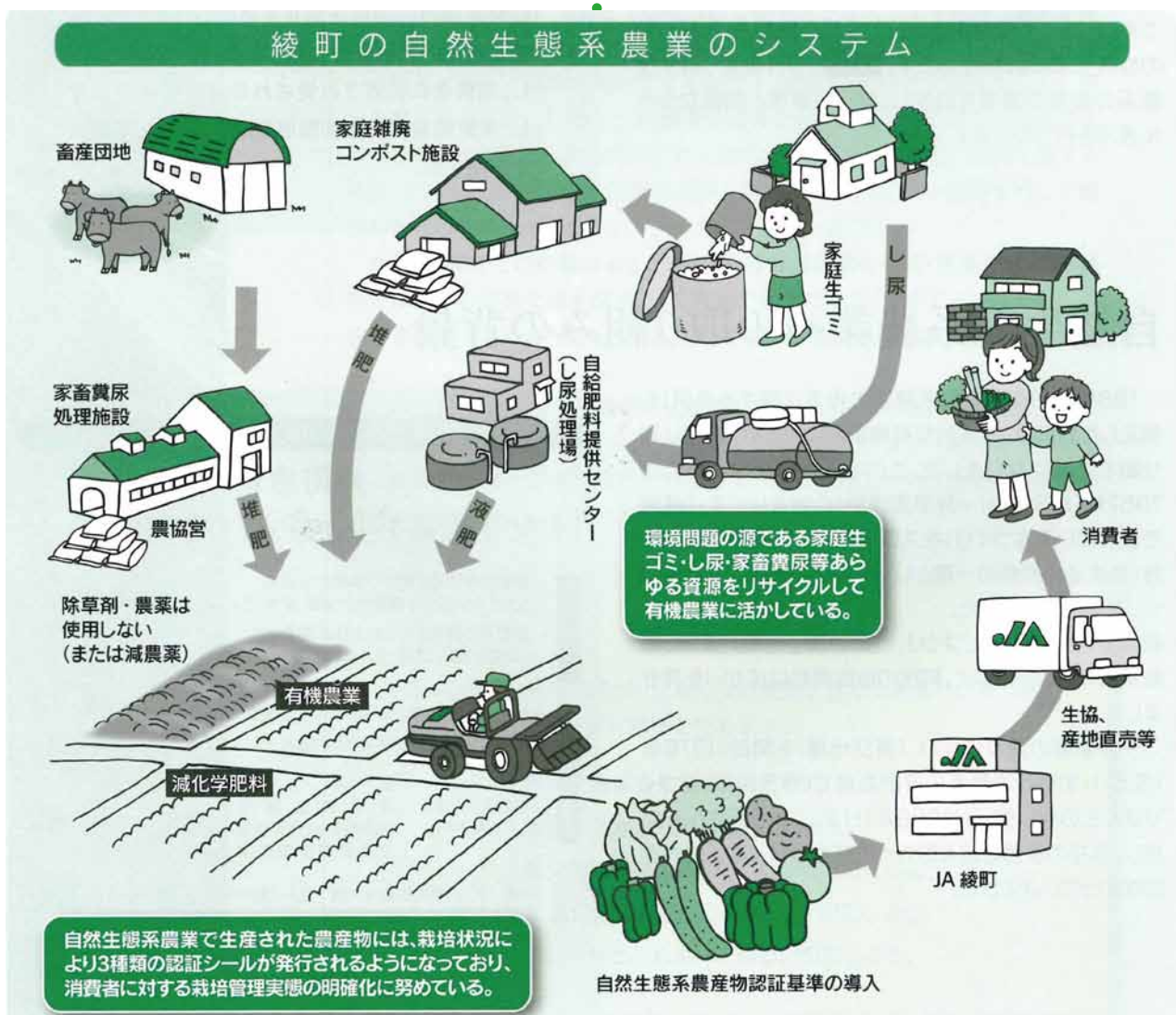
作付け品目は、今入荷中が里芋、生姜、レタス類。今後入荷が大根、人参、春菊、スイスチャート（ふだん草）、長ネギ。今季終了がさつま芋、玉葱、じゃが芋です。

元は養蚕農家でしたが業界の衰退により農業へ転換。元々養蚕をしていた地域は農薬の使用を禁止されていたので、当たり前のように無農薬での農業に取り組む2代目となります。



人口減少が余り無く世帯数が逆に伸びています。

綾町の自然生態系農業のシステム



後を継ぐ前は、農協職員として自然生態系農業の普及に、町内外にと25年間活躍。平成3年頃には、綾町から5tコンテナで人参や大根、牛蒡^{ごぼう}と一緒に、綾町農産物の普及の為、農協職員だった郡さんと役場から現副町長の向井さんが来道され、1週間に渡りデモ販売されたのを思い出します。

畑を見学させて頂いた印象は、除草剤を使用していない畑にしては草が少なく、ご夫婦二人で良く整備されている印象でしたので、そのノウハウをお聞きました。

人参の場合は播種する1ヶ月前に耕起した所に透明マルチ（注）を張り放置、その間太陽熱で雑草の種が消滅、その後マルチを通路に敷き播種すると、通路にも播種した所にも草が抑えられる。（注：農業用マルチシート。作物を育てている畑のうねを覆う資材のこと）

春菊、ふだん草、玉葱、レタス類は育苗した



郡さんご夫妻

苗を、穴の開いていないマルチを設置、植穴を専用バーナーで穴開けし定植。（最初から穴の開いたマルチを使用した場合はそこから草が生える為）

大根やホーレン草もやはりマルチを張り、上記の方法で穴を開け直接人の手で播種するとの事、普通は播種機で一気に蒔いてしまうのですが、草取りの事を考えると播種に手間が掛かっても逆に良いと言っていました。

通路の草取りは、朝露がある時にガスバーナーで煮てしまうと簡単に除草出来ると最近発明。焼

くのでは無く草に水分が有る時に煮るのがポイントのようです。この技術にはビックリでした。

北海道農業で大量生産している所には不向きか



人参畑の様子



穴開け用バーナー



これが秘密兵器、除草用ガスバーナー



マルチにバーナーで穴開け。



ガスバーナーの威力で除草も少し楽になったようです



里芋



めずらしい親生姜



もしかかもしれませんが、小規模で取り組んでいる生産者には色々大変参考になる話でした。

最近、親生姜と表記して販売している物がありますが、親生姜とは種生姜の事で、じゃが芋の種芋は消えて無くなりますが、生姜の場合はそのまま収穫時まで残る場合が多く、それが親生姜になります。親生姜は植えた時の原形のままで収穫されるので「生姜は親孝行」のようです。子供が成長するけど、親はやせ細ったりしないってことなんでしょうね。辛い生姜が欲しい方は親生姜が良いそうです。親生姜の近くの生姜は辛いので、敢えて外していますとの事。こんな所にも配慮して頂いています。農協職員だった時の経験と、農家になってからの視点、観察、感性を生かし、愛情深く生産し、流通している姿が垣間見られました。

綾農業まつり&第29回 綾町有機農業推進大会

郡さんの案内で会場に着き指定された席に着くと、前田町長から「壇上に席を用意するのでそこに着席していて下さい。皆さんにご紹介しますので」と急に言われ驚きを隠せませんでした。郡さんも知らなかったようで、遠い北海道から行ったので町長が計らって下さったようです。又、この大きな大会の組織をまとめあげた郡会長の人の厚さも見逃すことはできません。

この会の趣旨は綾町憲章「自然体系を生かし育てる町にしよう」の基本理念をさらに追求し、「消費者に信頼され、愛され、綾町農業を確立し、安定



たくさんの人で賑わう綾町農業祭会場



農産物展示場の様子

的かつ長期的な振興と、消費者の健康で文化的な生活を確保すること」を目的とされ、一般町民や近郊地域の消費者との交流を図るとの事で、会場は600名程の人で埋め尽くされていました。

オープニングで150年前から受け継がれてきた郷土芸能「俵踊り」が熱演されましたが、毎年各自治体の持ち回りで5年に1度踊るそうです。この日は町内30ヶ所で披露されるそうですが、伝統文化継承の大切さを感じました。

郡会長の開会の言葉で会が始まり、前田町長や来賓の挨拶に続き、民間団体の綾農業寺子屋による子供たちの農業体験を始め、自然に触れ合う活動報告や、生産者・流通業者・JA職員・行政職員14名で構成された民間団体の綾町農業の未来を考える会の活動報告。さらに、(株)電通国際情報サービスさんと綾町がコラボし「ブロックチェーン技術を活用した農産物の高付加価値化」と題

した実証実験報告と未来性についての報告。

また、高知大学石川教授に「機能水利用と農業イノベーション」についての記念講演に続いて、この会の趣旨の振興に寄与、功績者に表彰並びに感謝状贈呈式が行われ、最後に大会決議案が採決され、「都市と農村との交流・共生を一層深めながら、綾町の自然生態系農業の発展に努力すること」を決議されました。

会場を移し「町と村を結ぶ食のふれあい広場」へ。自然生態系農業により作られた農畜産物を使用し、昔から伝わる伝統の味や暮らしの中から生まれた新しい味を、17支部からなる有機農業婦人部が丹精を込めて作った料理を囲みでの交流会です。毎年地区ごとに郷土料理のメニューが決められ、前日より20種類600名分の料理作りをしているそうです。その料理を囲み、生産者と消費者との交流を深め、故郷の食文化を見直す機会

綾町視察の旅



を提供する場になっていました。どれを食べても美味しかったのですが、手づくりこんにゃく、干し孟宗竹のお煮しめは絶品でした。会場では有機農業開発センターの野菜ソムリエ田代さんが、私の隣で料理の紹介やこのイベントに掛ける思い等親切にお伝えいただきました。次の日から来年の準備に入る人もいるとの事で、思い入れが深いと感じました。

外では文化祭と農業祭が同時に開催されており、各自治体、各組織、町による出店、イベントが盛りだくさんですごい賑わいでした。

又、綾町は有機農業の町が先行していた感が私の中にはありましたが、工芸の町としても約40もの工房があります。昭和40年から「ひむか邑（むら）」という工芸集団を立ち上げ「手づくりというものが貴重になる時代が来る。手造りの村作りをしよう」と工芸家が次々と移り住み、一時は300人を超す作家が在籍していたようです。1980年には国の工芸コミュニティ事業のモデル地区として指定を受けています。不便な農村がいかにか先進的な取り組みをしていたのかが伺えます。

綾町農業支援センター

郡さんの野菜以外はこのセンターから送って頂いています。ふるさと納税の発送もしながら施設名の如く農業支援部隊ともなっています。高齢化のための人的支援、機械の貸し出し、営農放棄地を利用したの営農活動等で、行政がここまで行っている所は無いように思います。

今回綾町を訪れて感じたことは、理念と組織が実に上手く有機的に絡み合い、しっかりとしているのではないかと痛感しました。今から半世紀前の前・郷田町長の熱い思いで「健康で住みよいまちづくり」を実現するのは「食生活の改善」からと考え「一坪菜園運動」が始まり、町民の自給運動は広がりを見せ、本質的な骨格が出来、それに付随し条例や、施設、組織が命を注がれるように幹や葉に成り、途中、



綾町農業支援センター前にて



綾の取り組みのポイントとなる、「手づくりほんもの処」



照葉樹林にかかる世界一の歩く吊り橋

現・前田町長に引き継がれ、7期28年に渡り継承しながら、今の時代に合った形でうまく発展して来たのではないのでしょうか。

その結果2012年に、国内では32年ぶり5ヶ所目の「ユネスコパーク」に登録されています。自治体主導で登録に結びつけたのは綾町が初めてです。豊かな生態系や生物多様性を守り、自然の恵みを受けながら文化的、経済的に持続可能な発展を目指す地域のモデルとなっています。

本来、オーガニックの語源は「ORIGIN」とされ、意味は「源、起源、始まり」です。一般的に理念なき企業は衰退するといわれます。多くの行政、団体、組織が綾町を訪れ、学び、目指し、実践して来たことでしょうか、形だけでは中々難しいと今回痛感しました。

環境保護に関する意識調査では、生産者や消費者が高く、流通、小売りでは極端に低くなる結果があるそうです。2020年の東京オリンピック迄、国の主導により有機市場は理念無き中でファッション的伸びは期待できるでしょうが、何故有機なのか？その本質的な取組みが必要と思えてなりません。食は人を良くすると書きますが、綾町は若い世代からバランス良く人が育つ環境が整い、良い食生活が又、良き人を育むという循環が、長い年月をかけて醸し出されてきた様に思います。

千歳からの直行便が無く、乗り継いで行かなくてはなりませんが、食、工芸、歴史、文化財、観光施設、五感に響く照葉樹林、そして人…。又、ゆっくり訪れてみたいと思う地でした。

今回、郡さんをはじめとして前田町長、行政、J A、実践振興会関係者の方々には大変お世話になりました事、この場を借りて深く感謝致します。

北の大地で、隠れ観光大使の任を遂行してまいります。



手づくりほんもの処では消費者に向け、綾町独自の金・銀・銅の認定制度を解説

最期に、郡さんから下記の文章が送られてきましたのでご紹介させていただきます。

私は、大した人間ではありません。普通の百姓です。しかし、子、孫達が「じじの野菜は美味しい」と、喜んでくれる事を楽しみ、励みに日頃の農作業を頑張っています。食べている笑みが最高のご褒美です。

その様な折、まほろば宮下様より「郡さんの野菜が欲しいです」とのお声が繋りました。

綾町は、学校給食には、極力地元生産者の食材を使っています。又、給食時間に、食材の生産者紹介をします。妻の名前で出荷しているのですが、何回か紹介されました。その度、孫が自慢げに「これ私のババアですと、皆に告げたよ」との事。その言葉に最高の感激を貰いました。私の農の思いは、このことにつきます。

皆さま、食べていただける方々の笑顔、喜びを思い浮かべ、今後も励んでいきたいと思っています。

今回はご多忙の中、有り難うございました。

綾町 郡 文則

